

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制（委員会・組織等）

点検・評価委員会

（責任者名） 飯干紀代子

（役職名） 学長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	本プログラムの履修状況や単位修得の把握には、学生ポータルとして教学情報を一括参照可能なUniversal Pasportシステムを通じて全学的に把握している。これと連動した教務データベースより、全学学生の本プログラムのみの履修状況の割合や単位修得結果について年度毎に分析して、実態把握をルーティン化していく。本プログラムが令和5年度開設のため、現在卒業必修となっている科目以外の科目についてはセメスター毎に履修状況を確認している途上である。
学修成果	本学のアセスメントポリシーに定められた、高い学修成果を得るための取組として、科目レベルの評価手段である授業評価アンケート、大学レベルでの学生生活アンケート（学修行動項目）、卒業時アンケート、卒業生アンケートを活用して、科目レベルでの成果達成状況や大学全体でのディプロマポリシー達成状況を把握することにより、成果の把握を可能としている。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	全開講科目を対象に実施している「授業評価アンケート」により授業スキル、教育の質保証、学習行動等についての内容が把握され、IR室より科目担当教員に科目別結果をフィードバックしている。授業担当教員は、評価結果を踏まえての次年度の改善案を提出するというプロセスをセメスター毎に遂行することで、IR・FDの仕組みを構築している。 本プログラムの構成科目である情報技術演習の令和5年度の評価結果については、「授業の狙いの適切性（5段階）」でクラス平均4.3、「授業時間外での学習（5段階）」3.4、「受講者自身の取組姿勢（10段階）」7.6であり平均に達しているが、本プログラムのキーワードに沿った回答項目をプログラム内構成科目向けに別途設定して理解度の把握も必要であると考えられる。
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	全学的に毎学期実施される「授業評価アンケート」での本プログラム構成科目の満足度やコメント内容を踏まえて、授業改善に活用している。令和5年度の質問項目には推奨度についての回答項目を設けていないため、前項でも記載したように、本プログラム構成科目を対象とした固有の授業内の意見聴取フォーマットの検討および実施を検討する。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムの構成科目「情報技術演習」については、共通教育基礎科目区分として2021年度まで「インターネット演習」の名称で全学必修科目として開設していたものを、2022年度より本プログラムの開設にあわせて内容をアップデートするとともに共通教育導入科目と区分名称を改めた。今後は、プログラムの他の構成科目の履修者数増に向けて、数理・データサイエンス・AI教育の重要性をアピールするなどの向上策を検討する。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	本プログラムは2023年度から開講して本申請時点では修了者が出ていないため、修了者の進路、活躍状況等についての評価を得るまでに至っていない。本学には卒業生対象のディプロマポリシー達成度の調査を実施しており、機会を活用して評価を得ることを予定している。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本学では毎年度に鹿児島市立地の企業団体より各ポリシーや高等教育への要望を聴取しており、様々な意見を教育内容の検討やポリシーの見直しに活用している。本プログラムは開講より日が浅いが、この機会を利用して本プログラムの内容や手法についても意見聴取を行っていく。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	まず私たち自身がすでに「データ」を構成する要素として、広く社会やビジネスシーンにおいて扱われていることを初回の授業内容で認識させる。スマートフォンの利用機会が多い日常生活日常生活の活動のほとんどで、支払、ポイント利用、ヘルスケア、GPS情報などが利用者自身のみならずサービス提供者にも利用されていることを改めて認識することにより、私たちの社会活動そのものがデータ活用によって成り立っていることを強調する。あわせてそのようなデータがどのような領域で活用されているか、どのような職種でどのようなデータが重宝されているかを意識することで、将来就くであろう職業におけるデータ利用の可能性を理解する。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	授業内で課題を提示して、遂行状況を確認することで授業内容や水準のモニターに活用する。また、全学で実施している毎学期の授業評価アンケート結果を元に、本プログラム科目についての学修の理解度、教育方法、アクティブラーニングへの参加態度などを参考に授業改善を継続的にやっていく。